

イスラエル・パレスチナ

イスラエル軍・機関、ガザ市民を拷問か（その1） 「ハマス」決めつけ拘束

- [朝刊 1 面](#)

毎日新聞 2024/3/22 東京朝刊有料記事



イスラエル軍に拘束され、トラックで上半身裸のまま運ばれるパレスチナ人ら＝パレスチナ自治区ガザ地区で2023年12月8日、ロイター

イスラエル軍が、地上侵攻したパレスチナ自治区ガザ地区で、イスラム組織ハマスとは直接関係がない市民を多数拘束して拷問している疑いが出ている。複数の市民が毎日

新聞の取材に証言した。拉致された人質やハマス幹部の居場所を突き止めるため、手段を選ばなくなっているとみられる。国連も事態を重く見て、調査を始めた。

「（兵士に）鉄棒で胸や背中、足を殴られ、大型犬に追い回された」。ガザ最南部ラファで暮らすイッサム・アリさん（22）は2月下旬、毎日新聞助手に明かした。イッサムさんは昨年12月24日、ガザ北部ジャバリアの自宅で妻や子どもと過ごしていたところ、イスラエル軍に拘束された。

収容先はガザ内の施設で、取り調べたイスラエル兵はイッサムさんをハマスの戦闘員だと疑い、「人質はどこにいる」と何度も尋ねた。「知らない」と答えると鉄棒で繰り返し殴打された。施設では12歳の子どもや高齢者、がんを患う病人らも同室。兵士らは深夜、寝静まった部屋に大型犬を放ち、脅迫したこともあった。拷問でけがをした人もいたが、イスラエル側は痛み止めを渡すだけだったという。

イッサムさんは19日後の1月12日、ラファで解放された。だが北部にいる家族とは離れ離れのままだ。「一体私が何をしたというのか。無実の市民を拷問し、辱めている」と訴える。

カタールメディアの記者、ディーア・カフルートさん（38）も、イスラエル当局から暴行を受けた。昨年12月7日、ガザ北部ベイトラヒアの自宅にい

た際、軍に拘束された。下着姿にさせられた後、他の住民数十人と一緒にトラックに乗せられ、イスラエル南部の軍基地に收容された。捜査を担当したのは、治安機関のイスラエル総保安庁（シンベト）だった。

ディアーさんは2018年、ガザでのイスラエル軍の秘密作戦について記事を書いたことがあったが、捜査官はその記事がハマス寄りだとして「お前はハマスの司令官の一人だ」と決めつけた。「ハマス幹部はどこにいる」と尋ね、殴打を繰り返した。捜査官は軍がディアーさんの自宅に火を放って燃やしたことを明かし、「家族の安否は分からない。知りたければ、真実を話すことだ」と迫った。

食事は毎日、パン1枚とジャムのみで、取り調べ中は冷たい床に座らされた。解放されたのは約1カ月後の1月9日。体重は10キロ以上減っていたという。ディアーさんは言う。「イスラエル軍はガザ市民を追い詰め、ガザから追い出したいだけだ」

相次ぐ被害の訴えを受け、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）もイスラエル軍による虐待や拷問について調査を開始している。米CNNは3月、UNRWAの未発表の報告書には、「男女双方に対する殴打、睡眠不足、性的虐待」などの証言が記録されていると報じている。

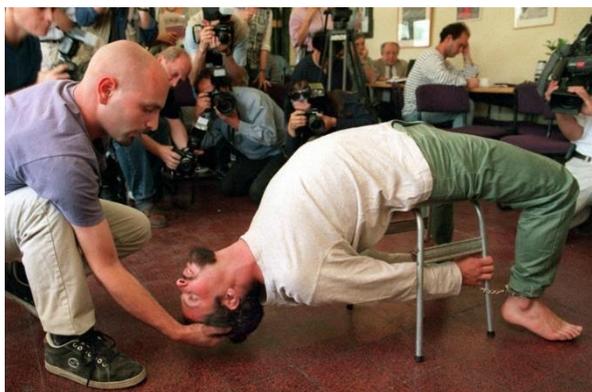
一方、イスラエル軍は、ガザ北部など避難を要請した地域に残る住民は「武装組織の協力者である可能性がある」と説明。「疑いが晴れば、その都度釈放している」と正当性を強調する。【エルサレム三木幸治】

イスラエル・パレスチナ

イスラエル軍・機関、ガザ市民を拷問か（その2止） ヨルダン川西岸でも疑惑

- [朝刊国際面](#)

毎日新聞 2024/3/22 東京朝刊有料記事



「バナナ」と呼ばれるシンベトの拷問方法を再現するイスラエルの人権団体関係者＝1998年5月、ロイター

イスラエル総保安庁、苛烈な取り調べ
パレスチナ自治区ガザ地区ではイスラエル軍が市民を拘束して過酷な取り調べ

を行っている疑いが浮上している。ただ、イスラエルによる拷問疑惑は今に始まったわけではない。イスラエルが軍事占領するヨルダン川西岸でも、人権団体が長年問題を告発してきた。問題の取り調べの多くを行っているのが、イスラエル総保安庁「シンベト」だ。

イスラエルには、イスラエル軍内にある「アマン」、米中央情報局（CIA）などに相当し対外情報を集める「モサド」、そしてパレスチナ人や国内過激派を担当するシンベトという三つの諜報（ちょうほう）機関がある。

シンベトは盗聴やスパイを通じて情報を集め、西岸地区などでパレスチナ人の摘発を続けている。イスラエルの人権団体「拷問に反対する公共委員会」によると、2001～22年、パレスチナ側がシンベトの拷問についてイスラエル法務省に抗議した件数は計1400に上る。

その取り調べは悪評が高い。同委員会によると、シンベトは拘束者に長時間、不自然な体勢を強いることがある。椅子の座面にあおむけに寝かせて体を反った状態にする「バナナ」や、腰をかがめた姿勢の「カエル」などだ。その状態で捜査官は素手や鉄棒で殴打したり、侮蔑的な言葉を放ったりする。他にも、聴取を30時間以上継続して睡眠を取らせない▽室内を真っ暗闇にして捜査官の顔が見えない状態で聴取する▽虫がわくような不衛生な部屋で拘束する——などの例があると指摘。拘束者は解放時、歯が欠けたり、歩けなくなったりしていることもあるという。

シンベトは西岸でパレスチナ人を逮捕し、イスラエル側に移送して取り調べるケースが多いが、被拘束者を占領地から占領国側に移送することは国際法違反にあたる。そもそも、イスラエルでは拷問の禁止について、法律で明文化されていない。シンベトの捜査手法は内規で定められているものの非公開だ。

担当者が処罰されることもほとんどなかった。西岸の拘束施設には監視カメラがほとんどなく、証拠は被害者の証言や傷痕だけだ。同委員会によると、拷問を巡る1400件の申し立てのうち、捜査官への調査が始まったのはたったの3件で、起訴された例は一つもないという。

犯罪の証拠なく拘束できる制度

さらにイスラエルには「治安上の脅威がある」と判断した場合、西岸のパレスチナ人らを犯罪の証拠がなくても拘束できる「行政拘禁制度」もある。拘束者は拘束理由も伝えられず、裁判も開かれぬ。拘束期間は当局と軍事法廷の判断で半年ごとに更新され、数年間に及ぶ場合もある。

今回、ガザで起きている拘束や虐待も、西岸での手法と類似している。【エルサレム三木幸治】

拘束市民の処遇、改悪拍車 治安・諜報機関の「汚点隠し」とも

イスラエルは近年、ヨルダン川西岸で拘束したパレスチナ人の処遇を「改悪」させており、昨年10月にパレスチナ自治区ガザ地区で戦闘が始まるとその傾向に拍車がかかっている。

ネタニヤフ氏は2022年12月に首相に復帰する際、警察や刑務所を管轄する国家治安相に極右政党のベングビール氏を充てた。ベングビール氏はパレスチ

ナ人拘束者への対応が「寛大すぎる」と主張。拘束施設的环境を「劣悪」にしたり、親族の面会を制限したりする方針を示した。

昨年 10 月に越境攻撃が起きると、ベングビール氏の主張は事実上採用されることになる。イスラエル政府は非常事態を宣言し、パレスチナ人拘束者に対する弁護士や親族の面会を禁止した。



西岸の人権団体「パレスチナ囚人クラブ」のカドゥーラ・ファリス代表は「10月7日以降、イスラエルは完全に変わった。国際的に定められた拘束者らの権利を一切守っていない」と指摘する。摘発されるパレスチナ人も増えており、イスラエルの人権団体「ハモクド」によると、昨年9月に1264人だった行政拘禁の対象者は今年3月には3558人に急増した。

ガザでのイスラエルの姿勢の背景には、戦時で世論がパレスチナに対して強硬になっていることに加え、治安・諜報機関による「汚点隠し」の側面がある。昨年10月の越境攻撃を事前に察知して防げなかったことに対しては、イスラエル国内からも政府に厳しい批判の声が出ている。新たな成果を出そうと、シンベトなどはなりふり構わず活動を進めている。

ただイスラエルはイスラム組織ハマスとの交渉によって100人以上の人質を解放する一方で、諜報に基づく軍の特殊作戦で解放したのは3人とどまっている。昨年12月にはガザ北部で白旗を掲げるなどして助けを求めているイスラエル人の人質3人を、兵士が誤って銃で殺害する悲劇も起きた。

ハマスのガザ地区トップであるシンワル氏や、残る100人程度の人質は地下トンネルも使って移動を重ねているとされる。イスラエルは戦闘開始から半年近くたっても居場所を特定できておらず、焦りを深める。少しでも情報を得ようと、苛烈な手段もいとわなくなっている。

一方、ガザを支配するハマスと西岸を治めるパレスチナ自治政府も、人権問題では以前から度々批判を受けてきた。

国際人権団体「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」（HRW）は18年に公表した報告書で、両者が自らに批判的なパレスチナ人を取り締まるために恣意（しい）的な逮捕を行っている」と指摘した。ハマスは拘束者を「バス」と呼ばれる小部屋に閉じ込め、食事や睡眠も規制しているといい、「パレスチナ人に対するイスラエルの長年の慣行と類似している」と批判した。【エルサレム三木幸治】